

日

本

語

発音アクセント解説

—解 說—

日本語 発音アクセント解説

昭和41年 8月10日 第1刷発行

昭和47年 4月20日 第11刷発行

編集人 日本放送協会
東京都千代田区内幸町2-2-3

発行人 浅 沼 博

印刷 凸版印刷
製本 豊文社

発行所 日本放送出版協会
東京都千代田区内幸町2-1-18
郵便番号100 振替 東京49701

目 次

共通語の発音とアクセント

金 田 一 春 彦

第1章 共通語とは……………5	第3章 共通語のアクセント……………18
第2章 共通語の音声……………8	第1節 アクセントとは……………18
第1節 拍とは……………8	第2節 日本語のアクセント……………22
第2節 日本語の拍……………10	第3節 共通語のアクセント……………26
第3節 共通語の拍……………12	

共通語の発音で注意すべきことがら

桜 井 茂 治

第1章 母音の無声化……………31	第1節 連濁とは……………40
第1節 母音の無声化とは……………31	第2節 共通語における
第2節 共通語の	連濁の一般的傾向……………40
母音の無声化……………32	第3節 連濁の現状……………42
第2章 ガ行鼻音について……………36	第4章 東京語特有の発音……………42
第1節 ガ行鼻音とは……………36	第1節 拗音の直音化現象……………42
第2節 共通語のガ行鼻音……………37	第2節 一種の捉音化現象……………43
第3章 連濁について……………40	

共通語のアクセント

秋 永 一 枝

第1章 アクセント	アクセント……………77
には法則がある……………45	
第2章 名詞のアクセント	第6章 特異なアクセント環化
(表1～3)……………46	をする原形……………82
第3章 動詞のアクセント	第7章 ことばの連綴……………82
(表4～6)……………60	アクセント……………82
第4章 形容詞のアクセント	第8章 古いアクセント……………85
(表7～9)……………72	新しいアクセント……………85
第5章 その他の単語の	第9章 アクセントを変化させる
	もの(音韻の法則)……………88

数詞、助数詞の発音とアクセント

桜井茂治
秋永一枝

第1章 数詞の発音とアクセント	91
第1節 単純語	91
第2節 複合語	92

第2章 数詞+助数詞 の発音とアクセント	94
-------------------------	----

全日本の発音とアクセント

平山輝男

第1章 発音とアクセントの概観	103
第2章 おもな発音の特色	106
第1節 中舌母音の分布	106
第2節 語中・語末のカ行、 タ行の濁音化	107
第3節 母音の無声化	107
第4節 エイ [ei], エー [e:] の分布	108
第5節 ガ行音とカ行音 とガ行音	108
第6節 子音で終わる拍を持つ 方言とその系譜	109
第7節 イントネーションと アクセント	110
第3章 アクセント	111
第1節 アクセント分布の諸相	111
第2節 代表方言の アクセント体系	113
第3節 代表方言アクセント	

の型の対応	114
第4節 主要方言のアクセント 比較表	115
発音アクセントの分布図	
第1図 中舌母音の分布	131
第2図 語中語末のカ行・ タ行の濁音化	132
第3図 母音の無声化	133
第4図 エイ [ei], エー [e:] の分布	134
第5図 ガ行音とカ行音と ガ行音の分布	135
第6図 子音で終わる拍の 分布	136
色刷 A 方言色の濃い音声特色の 分布図	巻末折り込み
色刷 B 全日本アクセント 分布図	巻末折り込み

共通語の発音とアクセント

金 田 一 春 彦

第1章 共通語とは

1. 《共通語》ということばは、《平和》《自由》《民主主義》などと並んで、戦後になって著しく使われるようになったことばの化身である。しかし、このことばの意味は、かならずしもはっきりしていない。《共通語》は《標準語》とどちらがうのか。東京のことばがすなわち共通語なのか。しばしばいろいろの疑問が発せられる。

《共通語》ということばは戦前にもあった。日本の文化人とインドの文化人とが話をしようとする。おたがいのことばが使えないし、わかりもしないしするので、やむをえず英語を使って話す。こういう場合の英語は《共通語》と呼ばれた。同様に、日本の中でも、はなはだしくちがった方言の持ち主が話をする場合に、おたがいにわかるようなことばで話しあう。そのことばが《共通語》と呼ばれたものである。そういう場合の共通語の実体は、その時その時によってちがい、東京のことばに近いことばである場合もあれば、大阪のことばに近いことばである場合もあった。戦後、《共通語》と呼ばれていることば、特に、この辞典で《共通語》と呼ぶところのことばは、そういう《共通語》ではない。

2. 明治の世、日本が独立国として海外諸国とまじわりを結ぶようになった時に、あらためて感じられたことの一つは、日本各地の方言のちがいの激しさだった。外国の人に示すためにも、《これが標準的な日本語だ》というものを作っておく必要がある。そういうことから《標準語》の制定ということが急がれた。と言って、新しい日本語を作るのも大仕事だ、というわけでありあえす候補に上がったのが、首都東京のことばだった。

当時の国語学・言語学の最高權威上田万年^{かどゐ}氏は、明治29年の「帝国文学」1に発表した論文「標準語について」の中で「願はくは予をして新い発達すべき日本の標準語につき、一言せしめたまへ。予は此点に就ては、現今の東京語が他日其名譽を享有すべき資格を供ふる者なりと確信す。(中略) 予の云ふ東京語とは、教育ある東京人の話すことばと云ふ義なり。……」こういう発言をした。ここで、東京のことばは、にわかに標準語候補の資格を占めた。そうして明治40年になると、東京語は一躍イコール標準語の地位を得た。というのは、上田万年氏は東京で開かれた全国都視学集会で、「帝国語の標準は、現在の東京に於て、教育ある社会に普通に行はれて居ります言葉をいふのでございます」と言っているからである。〔石黒魯平氏の「標準語」p. 2～3による。〕これは、東京のことばがイコール標準語とみなされた最初であり、明治40年は記念すべき年だった。

東京のことは——“教養ある人たちの”という限定があったとしても、とにかく現実の東京のことが日本の一番正しいことばだ、という考え方は、以後明治・大正の時代を通じて強かったが、これには、当然のことながら批判が現われた。デッカイとかペランメーとかいうことばは、教養ある人たちの口にはのぼらないからいいが、けれども、オッコチルとかイッチャッタとかいうことばはそういう人たちの口からも飛び出しかねない。オッコチル・イッチャッタ、こういう東京のことはがたして標準語と呼ぶにあたうするか。こういう異論は、東京以外の地域の人たち、特に関西地方の人たちの間から起こった。この傾向が強まった昭和2年には、安藤正次氏の注目すべき発言が現われた。《標準語は現実の言語ではない。標準語は我々の理想的な言語であって、現実の東京語その他をもととして、これに影^{かげ}を^な加へて作っていくその理想の言語が標準語である》。安藤氏が『言語学概論』の中に述べた趣旨を要約するとこうなる。現実の東京語が標準語ではない。この言い方は多くの地方の人たちの耳に快くひびいたようだ。標準語＝理想的日本語という考えは、以後昭和敗戦に至る20年間、学界では支持されてきた。

しかし、この標準語がイコール東京語ではないという考え方は学界では歓迎されたけれども、学界以外では標準語はまだ実在しないという理想主義はかならずしも通らなかった。それは実際的ではなかった。たとえば、教育界では、成長して行く世代にことばを教える場合、実際に何かことばを教えなければいけないが、そういう時には標準語という理想的な日本語が誕生するまで手をつかねているわけにはいかないからである。だから文部省では、実際に東京のことはのうちの雅純な部分をえらび、——つまりオッコチル・イッチャウのような品位に欠けるような要素を除き、それで一つのことばの体系を作り、これを国語・日本語あるいは標準語と呼んで、教科書にも使うという明治以来の行き方を改めなかった。このことは新聞・雑誌の文章あるいは小説の地の文とも大体一致することばであったから、明治以後全国に普及し、少なくとも書きことばとしては動かしがたい勢力となった。これは《現実の標準語》と呼んで、学者の考えた《理想の標準語》と区別すべきものである。

こういう情勢が着々進んでいた大正の末期NHKが創設された。さっそくの問題はどのような日本語で放送を行なうかということである。ここでも事情は教育界とまったく同じことで《理想の標準語》の完成を待ってから放送にとりかかるわけにはいかない。あすからマイクにのせることばに困る。そこで、当時社会に広く行なわれていた教科書にあるような、新聞・雑誌や小説の地の文に書かれているようなことばを《放送用語》とした。つまり東京のことはのうち雅純なものをえらんでこれをアナウンサーに使わせ全国にながした。今までは主として書きことばとして普及していた《現実の標準語》が話しことばとして広まっていったことは、きわめて自然である。

戦後になってみると、この《現実の標準語》は、日本のすみずみにまで親しまれ、代表的な日本語としての位置はゆるぎないものになっていた。東京のことはに対する対抗意識のもっとも強かった関西地方でも、若い人の間には、どんどん《現実の標準語》が浸透していく。私は、戦前、関西地方で育った人たちの間には、東京語の文法・語彙はともかくとして東京語のアクセントをあやつる人はいないように思っていたが、戦後大阪の小学校などをたずねて調べてみると、子どもたちの間には、大阪の町中で育ちながら家庭の事情その他の関係で、

みごとな東京アクセントを身につけている子どもを何人か見つけて驚いた。このような事態になると《現実の標準語》が、いくらその実質が東京のことばそっくりであろうと、それを理由として日本語の代表と見ることに反対することはむずかしくなった。

こうなれば、あとは《標準語》という名前だけの問題となる。こうして《現実の標準語》の代わりに《共通語》という語が新たに用いられ、これが教育界その他にひろめられた。名づけ親は国立国語研究所あたりらしい。

元来、標準語もこの《共通語》も、方言に対する名前であるが、標準語という術語を使うと、それに対する方言は不正のもの、卑しいもの、やがて統一され消滅すべきものという語感をもつ。《共通語》という術語を使えば、それに対する《方言》はそのような下位の言語という気分は感じられず、共通語は公の席で使うことば、方言は私的生活で使うことばという対等の価値をもつ言語という色合いになる。そういう点から言っても、《共通語》ということばは望ましいもので、一般にも受け入れられた。

この辞典で《共通語》と呼んでいるものは、そういう意味の言語で、従来は、《標準語》とも呼ばれていたもの、そうしてやかましく言うと《現実の標準語》と呼ばれるべきものである。その実質は簡単に言えば東京語の精選されたもので、恐らく将来作られるはずの《標準語》にとって基礎的な資料になるはずの言語である。したがって、戦前言われていた——この節の1.に述べた共通語とは内容はちょっとちがうものである。1.に述べた共通語は、その使われる場面によってその内容がいろいろなものになろうが、共通語のうち、全国的な場面で使われる共通語が、この項にいう共通語だと言えまざういかもしれない。その意味で、この辞典にいう《共通語》は《全国共通語》の略称だと言ってもいい。

3. 前項に述べたようなことから、この辞典に出てくる発音・アクセントは共通語の発音・アクセントであるが、その正体は東京語の発音・アクセントというのとあまりちがわないものになっている。これは関西方言の人にはあるいは不満があるであろうか。戦後、文化人類学者の梅棹忠夫氏によって京都・大阪あたりの方言を基礎として《第2標準語》というものを作れ、という声があがったことがある。今ここで東京語というものをもっとよく観察してみることが必要のようだ。

東京は関東平野の中央にある。したがって東京のことばは関東のことばの代表だ——と考えたくなるが、どうもそう考えてはいけないうだ。

東京という土地からちょっと離れて、いなかをまわってみると、関東地方のことばは、東京のことばとはかなりちがうことに気づく。たとえば関東一帯に広まっているイクペー（行くべえ）・ケールペー（帰るべえ）ということばは東京ではまったく使われない。関東一帯でソレデヨー、コーシテヨーという間投助詞を使うが、東京ではだいたい使わない。関東地方一帯は敬語表現の乏しいところで、元来デス・マス体を使用しない地方であるのに対して、東京語には、敬語表現があり、デス・マス体を使う、等、等、等。

調べてみると、東京のていねい表現の類はすべて実は関西起源のものようである。その証拠は：——

- (1) 見ナイ・行カナイがデス・マス体になると、見マセン・行キマセンとなる。見マシナイ・行キマシナイとは言わない。ンという否定の表示は、関西の言い方で、関東に

はない言い方だ。

- (2) 白イ・嬢シイをゴザイマス体で言うと、白ウゴザイマス・嬢^おシュウゴザイマスと言って、白クゴザイマス・嬢^おシクゴザイマスとは言わない。白ウ・嬢^おシュウという語法は関西の言い方で、関東にはない言い方だ。

- (3) シテイマス・見テイマスより一段でいい言い方に、シテオリマス・見テオリマスと言う言い方がある。存在する意味をオルというのは関西の言い方で、関東の言い方ではない。

だいたいこの調子で、敬語表現と言われるものは関西方言の文法の上に成り立っている。語彙の面で言えば、東京人がショッパイを使わずカライで代用し、ヤル（自分から他人へ）とクレル（他人から自分へ）とを区別して使うなど、関西的で関東的ではない。オハギ・オデン……といった一連の女性語・ていねい語も、明らかに京阪語からの輸入である。

発音の面などでも、今の千葉県や埼玉県東部の方言の発音を聞くと、東京語の発音は京阪語の発音にむしろ近く、あるいはそっくりだと言ってもいいくらいである。恐らく、江戸の地固有の方言の発音はもっと京阪語とちがった、ナマリの激しいものではなかったか。それが京阪語の影響で今日のようになったものと考えられる。

元来東京の前身であった江戸の町は、近世の初めに出来た新興都市であったが、その時関東の人だけが集まって都市を作ったわけではない。三河武士が多くはいりこんで来たとともに、東海道一帯から近畿地方にかけての人が多く集まって商店街を作った。今でも東京に三河屋・尾張屋・伊勢屋・近江屋などの名が多いのは、そのなごりである。そういうわけで江戸のことは、相当、関西方言的な色彩を帯びた関東ことばであった。「膝栗毛」に出てくる江戸っ子・弥次喜多あたりは知ラナイの過去形を知ラナダと言っている。それを明治以後知ラナカタというようになったのは、関西色を振り捨てた例である。しかし、また発音の面でウの母音など、今の東京語の発音は、一時代前とちがい、くちびるをとがらせる習慣が強まりつつあり、これなどは西日本の方言に近づきつつあるものである。アクセントの点だけは、関西方言と激しい対立をなすが、あとに述べるとおり、日本全国を通じて一番普通の、いわばクセの少ないものであると言える。

以上のような事実を総合すると、東京語は、関東方言の一種というよりも、全国方言のうちの一つの方言という性格をもっていると言うべきである。そう考えれば、東京語を全国共通語と称することは、その言語の内容だけから考えても、妥当なのかもしれない。

第2章 共通語の音声

第1節 拍とは

1. どんな言語でも、一つ一つの単語は発音の面でいくつかの単位に分かれる。その言語を使って生活している一般の人は、その単語がいくつかの単位に分かれるということを考えて扱っているが、その一つ一つを「拍」という。たとえば、日本語で、「山」という単語は〔ヤ〕〔マ〕という二つの拍から出来ており、「桜」という単語は、〔サ〕〔ク〕〔ウ〕の三つの拍から出来ている。日本人が俳句をひねろうとして、指を折って5・7・5と数える。あの時の5とか7とかはすべて5拍・7拍という意味である。拍はこういう意味でその言語の

ズムの単位である。

日本では、日本語を表わすために、カナという文字をもっている。このカナは、原則として、1文字が一つの拍を表わす。(ア)(イ)(ウ)(エ)(オ)、(カ)(キ)(ク)(ケ)(コ)……などすべてそうである。ただし、例外として、《拗音》のカナと呼ばれるものがある、(キャ)(カ) (キ) (シャ) (シ) (シュ) ……のようなものは、2字集まって一つの拍を表わす。

日本のカナは現在全部で48字ある。有限である。多少例外があるが、同じカナは同じ拍を表わし、ちがうカナはちがう拍を表わす。このことが示すように、拍の種類はその言語では有限である。日本語では上に述べたように一つのカナが表わす48の拍のほかに、《拗音》の拍があり、さらに《はねる音》《つめる音》というような少数の特殊な拍があるので、全体で111ばかりの拍がある。この111の拍が組み合わせられて、すべての——何十万という日本語の単語が出来ているわけである。

2. 一つ一つの拍を、学者はさらに小さく分けて考える。たとえば、(サクラ)の(サ)を[sə]と分け、(ク)を[ku]と分けるのがそれである。この[s] [a] [k] [u] という一つ一つを単音(einzelnlaut)という。[]で囲んで書かれる、いわゆる《発音記号》の一つ一つは単音を表わす。

単音は拍よりも精密な分析の結果であるが、拍のようなしっかりした単位ではない。たとえば日本語で何種類の単音を使うかということはちょっと言えない。たとえば、(カ)(キ)(ク)(ケ)(コ)はローマ字で書くと、ka・ki・ku・ke・koと書かれるから、このkの部分はみな同じ発音かと思うが、実際はそうではない。いっしょに組み合わせられる母音が、[a]であるか[i]であるか[u]であるかによって微妙にちがう。(ハ)(ヒ)(フ)(ヘ)(ホ)などはその極端な場合で、ローマ字でこそha, hiなどと書かれるが、ヒの時は、iという母音の影響を受けて、ドイツ語の“ich(私)”という場合のchと似た音である。(フ)の時には母音uの影響を受けて上下のくちびるを近づける音でfに似た音が現れる。(ハ)(ヘ)(ホ)も同様で微妙にちがう。はねる音の(ン)にいたっては、次に来る拍のちがいによって、[m]になったり、[n]になったり、[ŋ]になったり、あるいは種々の鼻母音になったりする。つまり環境によってちがった単音が現れる。発音記号で書くときには、印刷の都合もあって、少数の文字しか使わないが、ほんとうに精密に表わそうとしたら、いくらでもふえる。その数ははっきりいくつということと言えないほどである。

このように単音の数をはっきり言えないのは不便なことである。それでは記号で表わすことは正確ではないことになる。拍より小さい単位をもうけて、しかも、いくつというきまった数のものにしたい。こういう考えで設定された単位が、言語学でやかましい《音素》(phoneme)という単位である。

音素を設定するには次のようにする。たとえば、はねる(ン)は、その次の拍がカ行音であるかサ行音であるかタ行音であるかによって微妙にちがうけれども、《次の音が出やすいような口構えをして、鼻から声を出す》という点を抽象すれば、そういう性質をもった一つの音だと解釈できる。hで表わされるハ行の子音も、《次の母音が出るのに都合のいいような口腔の中のどこかをせばめて出す息の音》と考え、そういう音をh|という記号で表わすのだと解すれば、ハ行の子音は(h)という一つの音だと解釈することができる。このよ

うにして一つ一つの単音の似た点を抽象し、ちがいはその環境によって起こるのだと解釈する。そのように考えて到達した一つ一つの単位、これが、〈音素〉である。音素は/h/というように、2本の斜線の間にはさんで書かれるのが普通である。

日本語の音素は、このように考えると、次の24種類と認められる。

〔母音〕 /a/ /i/ /u/ /e/ /o/

〔子音〕 /k/ /g/ /p/ /s/ /c/(=ts) /z/ /t/ /d/ /n/ /h/ /p/ /b/ /m/
/j/ /r/ /w/

〔特殊音素〕 /N/ (はねる音) /r/ (つめる音) /R/ (引く音)

ローマ字という文字は、元来ラテン語の一つ一つの音素を表わそうとしたものである。単音を表わそうとしたものではない。

3. 前々項に述べた拍は、音素が連続して出来たものである。音素一つで出来あがったものもあるが、二つ以上で出来ているものもある。その場合、〈音素がどのように結び付いて拍を作るか〉ということが言語・言語によってちがう。そうしてそのちがいがその言語の根本的な性格を形づくる。日本語の拍はどのような性格をもっているか。

第2節 日本語の拍

1. 日本語の拍は前節1.に書いたように111個ある。これらのものも、2.3.で述べたように、単音——音素の組み合わせで出来ている。ところで日本語には〈単音・音素の組み合わせ方が非常に単純だ〉という著しい特色がある。

たとえば、(サクラ)の(サ)は/s/+/a/、であり(ク)は/k/+/u/で2個の音素の組み合わせである。(サイタ)の(イ)は/i/という音素1個だけから出来ている。(キ)とか(キ)とかいう拍は一番複雑であるが、これとて/kja/あるいは/kju/であるから、3個の音素の組み合わせにすぎない。一方、はねる音の(ン)とか、つめる音の(ッ)とかは、それ以上分析できない、1個の音素だけから出来ている拍で、このような拍は、外国人の目には、非常に特殊なものとして映じることで知られている。

アメリカ人などがしゃべる日本語を聞くと、相当じょうずな人でも、はねる音やつめる音の発音がおかしい。「日本の着物はきれいですね」というようなことばを、[ニッポンノウキモノッワー キレィデュネィ]のように言う。(ニッポンノ)というところは日本語では五つの拍であるが、アメリカ人の耳には三つの拍として捕えられる。これは、英語ではnip (端む)という単語は1拍の単語として扱い、weaponのponとか、pingpongのpongとかを1拍として扱い、そのために、日本語の(ニッポン)に対して、ニッを1拍、ポンを1拍と意識するというわけである。

そういうわけだから、逆に日本人は英語の1拍を2拍以上に感じるということになる。ピンポンというような単語は、むこうでは2拍であるが、日本語になると4拍になっている。strikeというような単語は、むこうでは1拍であるというものの、日本語ではストライクという5拍の単語になっている。われわれが、まだよく知らない英語の歌を歌おうとすると、フシだけ先に終わってしまって歌詞が残ってしまいそうになることがあるが、この一つにむこうの拍一つをあてはめることになれないためである。

これを要するに、日本語の拍は、英語の拍に比べて著しく組織が単純である。《一つの子音プラス一つの子音》というのが標準的な形で、そのあとにもう一つ別の子音が来るというようなことはない。このことは、日本語に、《一つ一つの拍は母音で終わる》という基本的な性格を生み出している。母音で終わる拍は《開音節》と呼ばれているところから、日本語という言語は《開音節語》だと呼ばれることがある。

ヨーロッパの言語では、イタリア語が開音節語だとして有名である。イタリア語のほとんどすべての単語は母音で終わっている。が、徹底した開音節語は、ハワイからニュージーランド方面のポリネシアの言語である。開音節の言語は、メロディーにのせて歌うのに便利であるので、音楽的な言語と言われる。アメリカの言語学者マリオ・ペイが『言葉の話』(The Story of Language) という本の中で、日本語を、イタリア語・スペイン語と並べて世界の言語の中の最もひびきの美しい言語としてはめているのは、この開音節語であるためである。

2 日本語の拍は、前項に述べたように、組織が簡単である。音素が一つか二つかせいぜい三つ集まって一つの拍が出来ている。そうしてその音素の種類が少ない。というところから《日本語の拍の種類は非常に少ない》ということになる。さきに、日本語の拍の種類は111だと言った。英語の拍の種類は幾つあるか。英語学者の模垣実氏の『バラとさくら』には、氏が計算したところ3,000以上あったことが報じられている。イタリア語などは少ないようであるが、それでも日本語よりは多い。中国語の北京官話も、拍の少ない言語だと言われながらも、411個ある。ハワイ語あたりは世界で一番拍数の少ない言語の代表であるが、日本語も少ない方である。

日本語に拍数が少ないということは、日本人の生活にいろいろな影響を及ぼしている。たとえば、日本語では、子どもが文字を覚えるのに非常に便利である。子どもは、(カ)という拍は「か」と書き、(キ)という拍は「き」と書く……というように111種類の拍を表わす文字の書き方さえ覚えていけば、あとはどんなことでも自由に書ける。小学校の1年生の間に、日本人の子どもの作文能力ののびることが著しいのはそのためである。アメリカあたりでは、1年生の子どもにドッグはdogと書く、キャットはcatと書く……というように一つ一つの単語の書き方を教わり、はじめのうちはその覚えた単語だけを文につづる。これは拍の数が多いために、そうならざるをえないわけである。

ところで、拍の種類が少ないことは、同時に不都合な事態の原因にもなる。少数の単位で、無限に多数の内容を表わそうとするのであるから、当然同音語が多くなる。それを避けようとする、日本語の単語は長大になる。「赤」と「拓」^{トク}、「秋」と「明き」と「館き」^{カン}、「朝」と「麻」など同音語の例はいくらでも拾える。これはシャレを言うことを趣味とする人にとっては便利な言語かもしれない。しかし、ラジオでアナウンスをする場合などには、やっかいな言語だということになる。

「子ども」「かいこ」「なまこ」「こな」などは古い時代には、すべて短くただ「こ」と言った。それではまぎらわしいというわけで、今日のようなコドモ・カイコ・ナマコ・コナという長い形の単語を使うようになった。日本語の会話は、英語に比べて非能率的だと言われることの原因の一つはここにある。

同音語による誤解を防ぐためであるかのように日本語の単語は、どの拍をどの拍より高く

言うというきまりをもっている。「赤」と「垢」の区別、「朝」と「麻」の区別はそれによってなされる。あとで述べる日本語で〈アクセント〉と言われるものがそれで、これは同音語を文字に書かずに区別する重要な要素である。

第3節 共通語の拍

1. 日本語の中で前章にのべた共通語にはどのような種類の拍があり、それらはどのような内容のものか。この節ではこれを具体的に述べることにする。

2. 共通語にはまず標準的なものとして次の111種類の拍が存在する。〔 〕の中はその音価を単音に分析したものである。

(1) 直音節に属するもの。

(ア) [a] 口を広く開いて発する母音。

(イ) [i] くちびるを横に引き、舌の上面の前の部分を上あごの手前の部分に近づけて発音する母音。注意すべきはこの(イ)が(セイト)〔生徒〕、(ティネイ)〔丁寧〕のように、エ列の拍の次に来た場合で、自然な発音では(セート)〔テーネー〕のように、く引く音に変化する。ただし、(タテイト)〔縦糸〕のように、その間に意味の切れ目がある場合は、そうはならない。

(ウ) [u] 舌の上面の奥の方を高めて上あごの奥の方に近づけて発する母音。以前(ウ)に限らずウ列の母音は、くちびるをとがらせず、自然のままにして発音する。つまり[w]の音で発音するのが標準的とされていたが、近ごろくちびるをとがらせるのが一般的になりつつある。そうならみれば、その方が発音がはっきりしていいにちがいない。(ウマ)〔馬〕、(ウメ)〔梅〕のように、マ行音の直前に来た場合、単語によっては自然の発音でくはねる音の(ン)になることがある。

(エ) [è] 舌の位置・くちびるの形ともにアとイの中間の音。

(オ) [o] 舌の位置はアとウとの中間の音。くちびるをまるめる。(ヲ)の条を参照。

(カ) [ka] [k]は舌の上面の奥の部分を上あごの奥の部分に付けて閉鎖を作って発する無声の破裂音。それと母音[a]との複合した音。

(キ) [ki] [k]の部分は、無声の破裂音であることは[k]と同じであるが、次の[i]の音に引かれてカの[k]より舌の手前の部分が、上あごの手前の部分に付いて発音される。このように、ある子音が次に来る母音[i]の影響でその調音位置がずれることを〈口蓋化〉と呼ぶ。また、(キ)の音は、カ行音・サ行音・タ行音・ハ行音の直前そのほか、限られた位置に来た場合、自然の発音では、口構えだけを残して声帯を振動させずに、息だけで発音することがある。いわゆる〈母音の無声化〉で、これについては、巻末の桜井茂治氏の記述(31ページ)を参照されたい。

(ク) [ku], (ケ) [kè], (コ) [ko] [k]の閉鎖が作られる場所が(ク)(ケ)(コ)により、多少ずつ異なる。服部四郎氏によると、(コ)の[k]は(カ)の[k]よりさらに奥。(ク)(ケ)の[k]は(カ)の[k]より手前で、(キ)よりは奥という。(ク)は、その立つ位置により、〈母音の無声化〉が起こる。

- (ガ) [ga] [g] は [k] の有声音。それと [a] と結合した音。単語の語中・語尾に来た時に、ガのカナが [ga] と発音されるか [ɣa] と発音されるかがしばしば問題になる。巻末の桜井茂治氏の解説 (36 ページ) を参照。
- (ギ) [gi] [ɣ] は (キ) の [k] と同じく口蓋化を起こし、[i] のために (ガ) の [g] より手前に近い部位で発音される。[pi] とまぎれる点については [ga] に準じる。
- (グ) [gu], (ゲ) [gɛ], (ゴ) [go] [g] も (ク) (ケ) (コ) の [k] と同じように多少ずつ位置がずれている。
- (ガ) [ɣa] [ɣ] は [g] と同じ口構えで出す有聲の鼻音。《ガ行鼻音》と呼ばれる音で、ことばの最初には現われない。カナでは [ga] と同じ文字で書かれるが、どのような場合に [ga] と発音され、どのような場合に [ɣa] と発音されるかについては巻末の桜井茂治氏の解説 (36 ページ) を参照。
- (ギ) [ɣi] (キ) (ギ) の [k] [ɣ] に準じる。[ɣ] の口蓋化した音。ガ行鼻音で、ことばの最初には現われない点など (ガ) に同じ。
- (グ) [ɣu], (ゲ) [ɣɛ], (ゴ) [ɣo] (ク) (ケ) (コ) (グ) (ゲ) (ゴ) の場合に準じて [ɣ] の位置は多少ずれる。ガ行鼻音で、ことばの最初には現われないことなど、[ɣa] に準じる。
- (サ) [sa] [s] は舌のさが上あごの一番手前の部分に近づいて発する無声の摩擦音。
- (シ) [ʃi] [s] とちがいで、舌の上面の前の部分が上あごの手前に近づいて発せられる—いわゆる「口蓋化」を起こして発せられる摩擦音。英語の she の sh とちょっと似ているが、くちびるをまるくするようなことはせず、やはり [s] に近い。場合により、《母音の無声化》を起こす。
- (ス) [su] [s] の部分は (サ) に準じる。以前、東京地方で (ス) の母音に対してくちびるをまるめず、また舌のむしろ前の部分を上あごに近づけて発音する個人があった。これを [ü] で表わす。が、漸次そういう発音は聞かれなくなりつつある。環境により母音の無声化を起こす。
- (セ) [sɛ], (ソ) [so] [s] はサの [s] に準じる。[ɛ] [o] は (エ) (オ) に準じる。
- (ザ) [dza] 単なる (サ) の有声音ではない。ていねいに発音すると、舌のさをまず上歯の根元にあて、破裂させるとともにそれをずらして [z] の位置におおしてから [a] を発する音である。いわばヅァとも書くべき音である。ただし、語中・語尾のものは、むぞうさな発音では [za] で発音されることもある。
- (ジ) [dʒi] これも単なる (シ) の有声音ではない。舌のさをまず上あごの手前の部分につけて閉鎖を作り、破裂とともに舌のさをややうしろにずらして摩擦音を出し、次に [i] に移る音。カナで書くならばジよりヂがびったりの音。
- (ズ) [dzu] [dz] の部分は (ザ) の [dz] の部分に準じる。したがってカナで書いたらズよりむしろヅと書いた方がびったりの音。これも (ス) (ツ) と同様に以前には [dzü] で発音する個人があった。
- (ゼ) [dzɛ], (ゾ) [dzo] [dz] の部分は、(ザ) に準じる。(ツエ) (ツォ) と書いた方が実はふさわしい音。

- (タ) [ta] [t] は舌のさきを上歯の根元のあたりにつけて発する無声の破裂音。
- (チ) [tɕi] [tɕ] は、[t] に似て舌のさきと上あごの手前の部分との間で作られる無声の破裂音。つまり [tɕ] の口蓋化した音である。[tɕ] はその音から (シ) の子音の [j] に移行する摩擦音。環境により母音が無声化する場合がある。
- (ツ) [tsu] [ts] は (タ) におけると同じような [t] の音から、(ス) の音に移行する摩擦音。東京では、(ス) の場合同様、母音の部分が発音するときに [ɯ] の音で発音する個人もあった。環境により、母音が無声化することがある。
- (テ) [tɛ], (ト) [to] (タ) の [t] に似た音と、[ɛ] [o] との結合。
- (ダ) [da], (デ) [dɛ], (ド) [do] [d] は [t] の有声音。(タ) (テ) (ト) に準じる。
- (ナ) [na] [n] は舌のさきを前歯の根元のあたりに付けて発する鼻音。
- (ニ) [ni] [ɲ] は [n] とちがひ舌の前の部分を上あごの手前の部分に付けて閉鎖を作った鼻音。つまり (n) の口蓋化した音。
- (ヌ) [nu], (ネ) [nɛ], (ノ) [no] 子音の部分は (ナ) と同じ。
- (ハ) [ha] この場合の [h] の部分は、[a] を発音する口構えを作るに先立ち、舌の上面の奥の部分と上あごの一番奥の部分とをせばめて作る摩擦音。したがって [h] という発音記号は、子音化した [ḁ] で表記した方が正確だと言われる。たとえば、神保格著『国語音声学綱要』P.83~84、国語学会編『国語学辞典』の P.992 を参照。
- (ヒ) [çi] [ç] は [i] より、舌と上あごの間をもっと狭くして発する無声の摩擦音。子音化した [i̥] と考えてもいい。場合により、母音が無声化する。東京の人の (ヒ) は、京都・大阪の人の (ヒ) より舌と上あごのすきまが狭く、摩擦のひびきが激しい。いわゆる江戸っ子の発音ではそれが極端になり、[çi] との間に混同を起こすことは有名である。
- (フ) [fu] [f] は両唇間の無声の摩擦音。子音化した [ɸ] と考えてもいい。場合により、母音が無声化する。
- (ヘ) [hɛ] [h] の部分は、エの口構えより舌の上面と上あごとの開きをもう少し狭くして発する無声の摩擦音。[ɸ] の子音化したものと言ってもいい。
- (ホ) [ho] [h] の部分は、オの口構えより、舌の上面と上あごとの開きをもう少し狭くして発する無声の摩擦音。くちびるのまる味の加わった一種の [x] であるが、[ɸ] の子音化したものと言ってもいい。
- (バ) [ba], (ビ) [bi], (ブ) [bu], (ベ) [bɛ], (ボ) [bo] [b] は上下のくちびるを閉じて発する有声の破裂音。(ビ) の場合でも特に口蓋化することはない。
- (パ) [pa], (ピ) [pi], (プ) [pu], (ペ) [pɛ], (ポ) [po] [p] は上下のくちびるを閉じて発する無声の破裂音。(ピ) の前でも口蓋化はしない。(ビ) (ブ) は、場合により、母音が無声化する。
- (マ) [ma], (ミ) [mi], (ム) [mu], (メ) [mɛ], (モ) [mo] [m] は上下のくちびるを閉じて発する鼻音。(ミ) の場合でもその調音位置は変わらない。
- (ヤ) [ja] [j] は [i] の音よりも、やや舌と上あごの間を狭くして発する有声の摩

擦音。もっとも [i] で発音してもいいから、[i̥] と表記してもいい。

- (ユ) [ju] [j] は (ヤ) の場合と同じ。むぞうさな発音で [ju] 全体がしばしば、[i] に近く発音される。

- (ヨ) [jo] [j] は (ヤ) の場合と同じ。

- (ラ) [ra] 子音の部分の発音にはずいぶん個人差がある。側面音の [l] を用いる人、いわゆる巻き舌の音の [r] を用いる人もいるが、服部四郎氏によれば、標準的な発音法は語頭と語頭以外とで異なり、(ラジオ) のような語頭では舌のさきとそれに続く舌の下側の面とが上歯のうしろの付近にふれて発音されるゆるい有聲の閉鎖音であり、(カラス) のような語中では語頭の [r] と同じ位置で発音される有聲のはじき音——舌のさきが歯ぐきあるいはその付近にむかってはじくような運動をただ一回いとなむ音である。服部四郎著『音声学』(岩波全書)の P.54 および P.94 を参照。

- (リ) [ri] 子音の部分 [r] は (ラ) の [r] とちがって [l] であることはまれである。語頭で弱い破裂音、語頭以外ではじき音になることは (ラ) の [r] と同様であるが、次の [i] に引かれて、口蓋化を起し、舌の上面の前の部分が上あごの方に持ち上がる。

- (ル) [ru] [r] は (ラ) の子音に準じる。語頭と語頭以外とで異なることも同じ。ただし、側面音になることは少ない。舌のさきがぶつかる上あごの場所は (リ) の場合よりは奥、(ラ) の場合より手前になる傾向がある。

- (レ) [rè] (ラ) の子音に準じる。語頭と語頭以外とで異なることも同じ。個人により側面音の [l] になったり、いわゆる巻き舌の音の [r] であったりする。舌のさきは (ラ) の場合よりも上あごの手前、(ル) の場合よりは奥のあたりにぶつかる傾向がある。

- (ロ) [ro] [r] の部分の発音は (ラ) (レ) に準じる。個人により、側面音の [l] になったり、いわゆる巻き舌の音の [r] になったりする。また多くの人の場合、語頭では弱い破裂音に、語頭以外ではじき音になり、両方の場合を通じて舌のさきのぶつかる上あごの場所は、(ラ) の場合よりもっと奥である傾向がある。

- (ワ) [wa] [w] は上下のくちびるの間を狭くして発せられる有聲の摩擦音。ただし、摩擦が少なく、母音の [u] と同じ音で発音されることも多いから、[ua] と表記してもいい。

このほかに特殊な直音節として (ツァ) [tsa] と (ワ) [wo] がある。(ツァ) [tsa] は、オトツァン [おとつぁん=父親] のような俗語だけに使われ (外来語は参照)、(ツ) の子音に母音 [a] がついた拍である。(ワ) [wo] は、「こわい (剛)」に「ございます」をつけた「剛うございます」というような場合の第2拍や、文章語「加うるに」の第2拍に現われることがあるが、これをただの (オ) [o] で発音する人も多く、標準的な拍とは見なされていない。

- (2) 拗音節に属するもの。

- (キヤ) [kja], (キウ) [kju], (キョ) [kjo] (キ) の子音である口蓋化した [k̟] の位置から

[j] を経て、母音 [a] [u] [o] に移動する音。(キ) は用例が少なく、そのあとには多くは引く音が来る。

(キ) [kja], (ク) [kju], (コ) [kjo] (キ) (ク) (コ) の子音が [k] であると同様に、[g] は [g] の音が口蓋化して変わったもの。(キ) は用例が少ない。

(ギ) [gja], (グ) [gju], (ゴ) [gjo] (キ) (ク) (コ) の [k] 同様、[g] の口蓋化した [j] を子音とする。[ガ] [ギ] [グ] [ゲ] [ゴ] と同様に、語頭には来ない。(ギ) は中でも用例が少なく、(スイギュー) (水牛) のように次に引く音が来る位置にしか来ない。

(シ) [ʃa] (シ) の子音 [ʃ] に母音 [a] がついたもの。拗音節の中では用例が多い。

(ジ) [ʃu] (シ) の子音 [ʃ] に母音 [u] がついたもの。ウ列の拗音節の中では最も用例が多い。ただし、環境により、無声化することがある。次に一般の直音節またはつめる音が来ると、東京の方言では (シ) に変化する傾向がある。例、「静粛」「輸出」。

(ソ) [ʃo] (シ) の子音 [ʃ] に母音 [o] がついたもの。拗音節の中では用例が多い。

(ジ) [dʒa] カナ書きから考えれば、また歴史的に見ても [ʒa] であってよいはずであるが、(ザ) (ジ) が [za] [ʒi] ではなく、[dza] [dʒi] であると同様に、はじめに [d] がはいて、破擦音であるのが標準的な発音である。つまり、カナで書けば **ヂャ** と書く方がふさわしい。[d] は口蓋化した [d] のこと。拗音節の中では用例は多い。

(ジュ) [dʒu] (ジ) と同様に、[ʒu] ではなくて、[dʒu] である。東京語では、次に一般の拍やつめる拍が来る場合には、(ジ) [dʒi] に転化する傾向がある。例、「算術」「新宿」など。

(ジョ) [dʒo] (ジ) (ジュ) と同様に、[ʒo] ではなく前に [d] がはいる。

(チ) [tʃa] (チ) の子音である破擦音 [tʃ] に母音 [a] のついたもの。

(チュ) [tʃu], (チ) [tʃo] (チ) の子音と同じ子音 [tʃ] に母音 [u] がついたもの。(チュ) の場合は次に来る拍は原則として引く拍である。

(ニ) [nja] (ニ) [nju], (ノ) [no] (ニ) の子音 [n] に母音 [a] [u] [o] のついたもの。(ニ) は用例が限られている。

(ヒ) [ɸa], (フ) [ɸu], (ホ) [ɸo] (ヒ) の子音 [ɸ] に母音 [a] [u] [o] のついたもの。(ヒ) は用例がきわめて少なく、地名の「日向」のほかには、「ビュービュー (風が吹く)」という擬音語ぐらいしかない。(外来語は3. 参照)

(ビ) [bja], (ブ) [bju], (ボ) [bjo] (バ) (ビ) ……の子音から [j] を経て [a] [u] [o] に至る音。(ビ) の用例は位置が限られており、きわめて少ない。(外来語は3. 参照)

(ピ) [pje], (プ) [pju], (ポ) [pe] (バ) (ビ) ……の子音から [j] を経て、[a] [u] [o] に至る音。(ピ) の用例はきわめて少なく、「ビュービュー (風が吹く)」以外にはない。(外来語は3. 参照)

(ミ) [mja], (ム) [mju], (モ) [mjo] (マ) (ミ) ……の子音から [j] を経て [a] [u]